

第 31 号神奈川支部情報

発行日<再発行版>2015年2月20日

(初版発行日) 2014年6月4日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

ホームページ <http://kanagawa.uketugu.org/>

本紙でインタビューされた絵鳩毅さんが1月3日に急逝されました。101才でした。

2015年の新年が明けたばかりの1月3日、いつもの時間に起きて朝食後もいつものように絵鳩さんは午前中パソコンに向かっておられたのだと思います。昼食時間になって自室から出て食堂に顔を出されたとき、「背中が痛いのでシップを貼ってください」と訴えられたとのことでした。居住施設のスタッフが顧問の医師と連絡をとってアドバイスを受けて、念の為にということで救急車を手配したそうです。救急車が到着したときも絵鳩さん本人は「自分で歩けますから」と立ち上がって歩き出したくらいお元気だったそうです。

ですが病院到着後に病状が急変して、残念ながらその日の21時すぎに帰らぬ人となってしまいました。病名は心筋梗塞でした。昨年暮の12月13日に行われたインタビューの後で、「年が明けたら、表題はお任せしますからまたおおぜいの皆さんで102年間の人生の“思いのたけ”を語ってください、とお願いし快諾していただいたところでした。

絵鳩毅さん 101 歳

香港フェニックステレビのインタビューに答えて証言

絵鳩さんは本年3月に101歳を迎えられました。茅ヶ崎市内の老人施設で、奥様ともどもたいへんお元気にお暮らしです。

先日5月20日、香港フェニックステレビのスタッフが訪ねてきて、絵鳩さんへのインタビューを行いました。テレビスタッフからの質問項目を絵鳩さんにお渡ししておきました。とは言え、ほんの数日前に届いたばかりで、短い日程のなかで絵鳩さんは全ての項目に答える原稿を準備され



て、的確にお答えしておられました。以下は、絵鳩さんの原稿にもとづいて、付け加えて話された部分なども含めて整理したものです。とくに後半の「続編」はあらかじめ準備されたものでなく、追加で質問されたことに答えられたものです。そこには、今まで私たちも聞いたことがない分野にわたっての質問もありました。

香港フエニックス・テレビ局の取材に答える

(インタビュー開催日 2014・5・20日)

絵鳩毅

(1) 絵鳩さんが中国に渡ったのはいつですか?そして中国で何をしましたの
すか?

・私は絵鳩毅です。今 101 歳となり、この茅ヶ崎市内の老人ホームに住んでいます。過去、私は大学卒業後、長野県で中等学校の教師をしていた 1941 年 7 月、28 歳で軍隊に召集されました。以後終戦間際まで、中国への侵略戦争に参加しました。

・私が所属した第 59 師団（兵力 1 万 2 千名）は、山東省済南に師団司令部を置いて、山東省の大半を武力占領しておりました。その占領目的は、この地に進出していた、三井、三菱などの大企業のために中国の石炭、小麦、綿花、塩、さらには強制労働のために人間までも、武力で確保することでした。
・この師団の占領目的を果たす上での最大の障害は中国共産党軍の八路軍でありました。そのためにわが師団は、この八路軍とその解放区に対しては、地区住民の皆殺しを企図する、凶悪極まりない作戦を、年数回にわたり実施しました。これが中国側で言う「三光作戦」です。すなわち、殺しつくし、焼きつくし、奪いつくす作戦です。具体的にはコレラ菌の散布、毒ガス弾の使用、村落の焼き打ち、平和住民の虐殺、捕虜に対する拷問、強制労働、そして虐殺、兵士による食料、家畜、金

銭の略奪、兵士による婦女子に対する強姦等々です。

・さらに、私が所属していた第 59 師団の第 111 大隊動(1,200 名)は、師団司令部のある済南の東南方 100 キロあまりの地点にある新泰に本部を置き、周辺 3 県を武力支配していた最前線部隊でした。当初私は陸軍二等兵として、大隊本部の治安係助手を務めていましたが、陸軍伍長に任官すると、機関銃中隊に呼びもどされて、初年兵教育の助教の任にあたりました。

「実的刺突」

・1945 年 6 月、山東省索格荘で大隊長による初年兵の検閲が行なわれましたが、そのときの科目のなかに「**実的刺突**（人間を突き刺すこと）が加えられました。

その日の午後、私は警戒兵を連れて、中隊に割り当てられた 4 名の中国人捕虜を、大隊本部まで受領に行きました。彼らを連行して、村の東外れにある広い畑地に出ると、そこにはすでに 4 本の柱が打ち立てられ、それぞれの後ろには深い穴が掘られていました。

この様子を見てとった捕虜たちは、一斉にサッと顔色を変えて、口々にこう訴えました。「私は農民です。八路軍ではありません。殺さないで下さい」と。そのなかに 15 歳くらいの少

年がいました。彼は私の脚にすがりつき、泣いて訴えました。「私には母親一人しかいません。母が私の帰りを待っています。家に帰してください」と。

私にも、年老いた母親がいて私の帰りを待ちわびていました。少年の叫びは、たしかに私の良心を揺さぶりました。だが、この少年の願いを聞き入れることは、「上官の命令は天皇の命令」である日本の軍隊では、自己の命との引き換えでしか許されません。私は良心の呵責に駆られながらも、少年の願いを一蹴してしまいました。やがて4人の捕虜たちは、それぞれの柱に結わえられ、人間から「実的」(生きた標的)に変えられてしまいました。

検閲が始まると、大隊長は馬に乗り、颯爽としてその勇姿を現しました。初年兵教育係助教だった私は、「実的」から百歩ほど離れた畑の窪地に中隊の初年兵30名を集めて敵状を説明し、「前方にいる者は皆敵だ、必ず突き殺せ！」と命令し、4列縦隊に並んだ最前列の4名に「出発！」の号令をかけた。4名は土煙を上げながら、無我夢中で、畑の上り斜面を這っていった。

やがて教官の「突っ込めー！」の号令がかかると、早やくも半狂乱になった兵隊が腰の短剣を抜いて突進する。だが、よろめいて倒れる者がいるし、ほとんどが標的を前にして立ち止まってしまった。「バカヤロー！敵だ！突くんだ！」という教官の罵声を浴びてわれに帰る。短剣を突き出すときに目をつぶってしまうのだろう。その剣

先は左右にそれて人間の胸は突けない。教官の「よし！」の許しが出るまで、めくら減法に突きまくる。

次の4名が出発する。状況はまったく同じだ。同じことが8回ほど繰り返されて、初年兵の検閲も「めでたく」終了した。大陸の夏の血の色をした大きな夕陽が、長いはらわたを地上に引きずって死んでいった中国人の屍と血の気を失ってしまった初年兵とを、わけへだてなく照らす。それはただただ、身の毛のよだつ光景だった。

この日の夜、中隊では初年兵のために酒をふるまい、祝宴を張りました。古兵たちは初年兵に寄ってきて「これでお前たちもやっと一人前の兵隊になれたなあ。おめでとう！」「おめでとう！」と口々に言った。だが、初年兵の表情は暗く最後まで晴れませんでした。初年兵も私も、その夜は寝つかれませんでした。



インタビューを受ける絵嶋さん

(2) 終戦当日8月15日の状況と、ソ連軍による武装解除についてお話しください。

・1945年7月にわが部隊は北朝鮮に移動して、ソ連軍との戦闘に備えるための陣地構築をしていました。私は機関銃中隊分隊長として、その最前線で、死を覚悟していました。

8月15日に中隊本部に呼ばれて日本の無条件降伏を知らされると、悔しくて泣きました。その夜、兵隊は誰も眠れませんでした。ヤケクソになった兵隊たちは、酒を飲んで大声で喚いたり、実弾をぶっ放したりして暴れまわっていました。その夜、自殺する者もいました。だが、翌朝になると、不思議にもわたしは明るい気分になり、帰国への希望がよみがえりました。

・やがて、部隊は約1日行程の場所への異動を命じられましたが、そこへの道中は、昨日まで従順だった朝鮮の人々からひどく罵られたり、石を投げられたりして、惨めな行軍となりました。そして、到着した五老里小学校でソ連軍による武装解除を受けましたが、帰国を夢見ていた私たちにはいささかの抵抗感もありませんでした。

(3)ソ連、シベリア収容所での生活と、帰国の動きがなかったのかについてお話しください。

・敗戦直後の1945年の10月、私たちは「帰国だ！」と言われて喜び勇んで「帰国船」に乗りこみました。しかしその船は帰国船ではなく、シベリア送りの船でした。ここで5年間の強制労働をさせられました。ソ連の収容所での食事は、日々燕麦の粥で、夕食だ

けにわずかな黒パンがついただけでしたので、みな慢性飢餓に苦しめられました。その上、零下30度の極寒でも屋外への重労働にかり出されました。私はあるとき、零下42度の除雪作業に出されたこともありました。また、民主運動が始まると、夕食後疲れ切った捕虜全員が、社会主義の勉強に強制的に呼び出されました。また、早く還りたいために友人をも戦犯に仕立てる「密告」が横行しましたので、私たちは隣の間人が信じられない人間不信にも悩まされました。

・ある時、私はソ連の政治部員に呼び出されて、中国での捕虜虐殺事件を問ひ質されましたが、私は何の抵抗もなくその事実を認めました。それも、あれは大隊長の命令だったから私には責任がないと安易に考えたからで、処罰のことなど考えもしませんでした。

・その後、私はまた政治部員に呼び出されて、親友の身上調査とその報告を命じられました。その友人は、「満州国」の警察官でした。「(自分にしたことが)バレたら帰れません」と私に洩らしていましたので、私はその命令を拒否しました。

ソ連の政治部員は、ついに大声で怒なりつけました。「もうよい！もう帰れ！だがお前は(日本へ)帰さないぞ！」と。そして「反動ラーゲル」に送りこまれてしまいました。日夜思いつづけてきた帰国の夢も消え失せて、絶望の日々となりました。

(4)ソ連から中国への送還されたとき

の状況と、そのときに考えたことをお話しください。

・シベリア抑留5年が経過した1950年7月のある日、ハバロスク収容所長から「諸君は明日帰国するから準備せよ」と、言い渡された。みな歓呼の声をあげました。だが、乗せられた列車は1車両に小さな窓が二つしかない貨物車で、扉を閉めて外から鍵までかけられましたので、夏の車内は優に40度を越える炎熱地獄でした。

・列車が、中国の綏芬河に到着して初めて、「**帰国ではない！まただまされた！**」と知り、怒りがこみあがるとともに、大きな不安に襲われました。

だが、中国に移管されるや、我々は立派な客車に乗せられ、そのうえ白いマントウ、焼豚、ゆで卵、漬物、熱いスープなどの豊かな食事が与えられた。また看護婦さんたちが「病人はいませんか」と親切に車内を聞いてまわりました。私は事実、生き地獄から救われた思いで、新中国に対する強い好感を持ちました。

(5) 撫順戦犯管理所に収容された初期のころの印象と心情をお聞かせください。

・綏芬河（スフィンガ）から私たち969名を乗せた客車は、1950年7月20日、撫順に到着しました。管理所の入口の立看板に「戦犯」の文字を目にするや、皆んな強いショックを受けました。自分が**戦犯**だとは誰も考えたこともな

かったからです。私も皆んなと同様でした。不満と将来に対する不安を紛らわすために、1年近く囲碁、将棋、花札、などの遊びに打ち興じました。管理所の工作人員たちは、これを見ても少しも咎めませんでした。

(6) 管理所での生活と活動をお話しください。

・周恩来総理は、「戦犯とても人間である。人間である以上その人格を尊重せよ」と指示されたということはあとで聞きました。ここでは強制労働はなく、中国工作人員たちは日に2度しか食事をとらず、それも高粱飯だった。だが、戦犯のわれわれには3度3度米の飯を与えてくれました。その上、正月や記念日には、お雑煮や鮎やお萩などの特別食までふるまってくれました。日々の運動時間の確保はいうまでもなく、週に1度の入浴、月に1度の理髪、体育日、身体検査、春秋2回の体育祭と文化祭の開催、数えきれないほどの映画上映会、患者の民間病院への入院、あり余る学習時間の保証等々、まったく至れり尽くせりの待遇でした。

・これにひき換え、私は、過去日本軍が中国人捕虜など人間と思わず、やたら拷問したり虐殺したりした事実を思い浮かべ、わが大和民族とその一員である自己とを深く恥じるとともに、この「敵をも愛する」中国工作人員たちの偉大な人間性に心から敬服いたしました。これが過去を反省する第一歩

となりました。

(7) 思想転変のプロセスについて お話しください。

・戦犯たちの1年にも及ぶ遊びに飽きたころ、各部屋には、日本語の書物や『人民日報』などが入るようになり、また管理所のマイクを通して「新しい時代」などの放送が始まりました。こうして朝鮮戦争の停戦や世界中で民主勢力が増大していることなどを知ると、われわれ戦犯にも新しい時代を知ろうという意欲が湧き、部屋ごとの秩序ある共同学習が始まりました。

・私たちはありあまる時間を、各部屋での共同学習に向けました。まず、毛沢東の著書『実践論』と『矛盾論』とを共同学習して強い衝撃を受けました。私が大学時代に学んだ理論学習も、祖国の危機を傍観した理論の遊戯であったことを強く反省させられました。

・また、毛沢東の著書『持久戦について』には、八路軍が守るべき「三つの民主」について書かれていました。その第1が「上級と兵士との民主」、第2が「軍隊と民衆との民主」、そして第3に「捕虜との民主」という驚くべき表現にも接し、私の感動はとまりませんでした。

・こうして、私は次第に中国共産党の「世界と人間を改造する」という遠大な理想と「恒久平和への願い」を理解し、「世界に冠たる皇軍」とか「優秀な大和民族」という空虚な優越感から

覚めて、被害者である中国人民の立場に立って、先の戦争の侵略性を批判できるようになりました。

・認罪運動の展開

～罪の告白と謝罪～

中国に移管されて4年目を迎えた1954年の春、私たち戦犯は「認罪運動」を展開しましたが、それは各自が戦争中に犯した一切の罪を自ら暴露し、中国人の前に謝罪する運動でした。

私は、当初戦争と戦後犯罪の責任は、天皇と天皇に繋がる命令者にあると安易に考えておりました。だか、現実に侵略軍隊の一員ある以上、被害者の立場に立てば、まったく同罪です。

のみならず、私は大隊長の残酷な命令に屈服して、初年兵に捕虜を虐殺させてしまいました。私をこの罪に陥れた大隊長の責任は、もちろん決定的に重い。そして、この大隊長の責任はまた「上官の命令は朕(天皇)の命令と心得よ」と宣言して憚らなかつた日本軍隊の総帥天皇にまでおよぶことも、またたしかであります。

だが大隊長の命令を実行したのは、まさにこの私であり、私の責任です。「日本の軍隊機構のなかではやむを得なかつた」という言いわけも、殺害された被害者には許されないことだと悟り、私は侵略戦争中に犯した一切を中国人民の前に告白し、心から謝罪いたしました。

(8) 軍事裁判の状況と、そのとき思

ったことをお話してください。

・中華人民共和国の日本人戦犯に対する軍事裁判は、きわめて寛大でした。瀋陽・太原での軍事裁判では、1109名の戦犯中、わずか45名が裁判にかけられましたが、死刑も終身刑もなく、最高刑が20年の禁固刑でした。しかもこの刑期のなかには戦後すでに経過した11年が算入されていました。

・その他の戦犯全員は、撫順の法廷で「起訴免除・即日釈放」の寛大政策に浴しました。この決定を言い渡されたときは全員が号泣しました。そして、発言を許された者は、皆んな一様に寛大政策への感謝と余生を平和と日中友好に奉げますと誓いました。

・そして、1956年夏、3班に分かれて帰国しました。私も最終班の一人として、再び懐かしい祖国の土地を踏むことができました。28歳で軍隊にとられた私は、すでに43歳になっていましたが、15年間にわたる暗い戦争の歴史のなかで、せめても最後の期間を撫順戦犯管理所で過ごせたことは本当に幸せであつた、といまも思っております。

(9) 帰国したときの状況と、絵鳩さんの心境をお話してください。

・1956年9月5日、帰国第3班・350余名を乗せた興安丸は無事に舞鶴港に着き、懐かしい肉親と再会しました。だが、当日の『朝日新聞』は「中共の手強い洗脳組帰る」などと野次を飛ば

していました。また、日本政府は当座の生活費として現金1万円と戦争末期の粗悪な軍装一式を与えられただけでした。私たちは、「これを着てまた戦争に行けと言うのか！」と憤慨しました。

・帰国後結婚して東京の新居に移ると、毎週1回、駐在署の警察官が、私の動静を探りにやってきました。私たち中国から帰還した戦犯は、みな危険分子として警察の「ブラックリスト」に載せられていたと言います。また、「中共帰り」ということで敬遠され、かなりの仲間が就職できず、安い日雇い労働に甘んじていました。

(10) 帰国後の生活と、社会から受けた抵抗についてお話してください。

① 帰国後の生活について

・私は帰国するや、戦前勤めていた長野県上田の高校に復職し、3年間勤務しました。その後東京に帰り、自宅の増築をしながら就職運動をしましたが、「中共帰り」と敬遠されて就職が果せませんでした。方向転換して、藤沢東海岸郵便局長を20年間務めました。

・帰国後誕生した私たち戦犯の会「中国帰還者連絡会」(略称「中帰連」)は、「侵略戦争に反対し、平和と日中友好に貢献する」ことを目的として活動しました。10年後に「日中友好協会」の分裂によりわが会も分裂すると、私は怒りと失望とでいずれの組織にも所属しないまま20年が過ぎました。

だが、撫順戦犯管理所の先生方の御招待を機に統一を果たし、私も会に復帰しました。以後常任委員、常任委員長、季刊誌「中帰連」の編集長などを歴任しました。

・2002年、高齢のため会が解散すると、わが会の精神と活動を継承する「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」が誕生したので、私は現在もその特別会員として、およばずながら引きつづき活動しております。

② 帰国後に受けた生活上の困難について

・私は、「中共の洗脳組」と言うレッテルを貼られました。幸いそれによる生活上の困難には特にあわないで済みました。しかし、私や会はしばしば社会的に抵抗や反発を受けたことは事実です。

以下、その主なものを挙げますと、
1、会が帰国直後に発行した図書『三光、日本人の中国における戦争犯罪の記録』は、国民に強い衝撃を与え、またベストセラーとなりましたが、5万部を発行した時点で、右翼の妨害により絶版に追いこまれてしまいました。
2、私個人としては、上田の高校教師時代に、生徒に侵略戦争の実態や中国で受けた寛大政策などを話したことでマークされました。ある時、県の教育委員による突然の授業査察を受けるようなこともありました。
3、また、当時新居が東京にあったために東京の高校に異動したく、多くの

有力な知人たちに依頼しましたが、新中国からの帰還者ということで希望はかないませんでした。そのために、やむを得ず特定郵便局の職員へと方向転換を致しました。

4、1984年、「撫順・太原戦犯管理所元職員代表訪日団」をお迎えした当時、「中帰連」の会議場には、つねに右翼の宣伝カーが妨害宣伝をしていました。

5、私たちの「帰国40周年」の前年にあたる1995年に発表された「戦後50年国会決議」は、侵略戦争に対する謝罪さえないお粗末なものとなり、アジア諸国の強い反感を買いました。

一方、国会議員たちは反動を強め、また御用学者たちの活躍が目立ち始めました。とくに東大教授の藤岡信勝やジャーナリストの田辺敏雄らはわが会を名指しで批判してきました。わが会は彼らの意図を打ち砕くために、季刊誌『中帰連』を発行し、現在に至っています。

(11) 来年は戦争終結70年を迎えます。70周年を迎えるにあたっての感想をお聞かせください。

・第1次世界大戦で、未曾有の人的・物的損失を体験した世界は、世界平和をまもるために「国際連盟」を発足させ、「ハーグ不戦条約」を締結し、日本もこれに同調しました。しかし、1931年の「満州」への武力進出を始め、日中全面戦争へ、やがてはファシスト国家=ドイツ、イタリアと手を携

えて、第2次世界大戦までもひき起こしてしまいました。つまり、日本は第1次世界大戦以降に誕生した世界の平和秩序を最初に破壊し、世界に有史以来最大の人的・物的損失をもたらした元凶でありました。

・だが、先の大戦で自らも生き地獄を体験した日本国民は、1947年に国民民主権、平和主義、基本的人権の尊重の3原則を理念とする平和憲法を制定して、過去の天皇制軍国主義国家から、近代的な民主主義平和国家への転換を世界に告知しました。だが、残念ながらこの世界平和の金字塔ともいべき「日本国憲法」が、いま危機に瀕しています。

・先の衆議院選挙で国民多数の支持を得て成立した第2次安倍内閣は、いま自民党発足以来の念願である「憲法改正」に狂奔しています。これは、日本を再び戦争のできる軍事大国にすることであり、世界的公約を破棄する暴挙であります。またそれは、日本国民を戦争の道に迫りやる陰謀であり、国民への裏切り行為であります。これを国民が黙認するなら、もはや日本に明るい未来がないばかりか、世界平和

の基盤である日中友好も失われてしまうであらうでしょう。今こそ日本国民はこの安倍内閣を政権の座から追放すべきであらうでしょう。

これこそが、日本の運命を左右する大問題であるとともに、日本国民に課せられた戦争責任でもあり、この責任を果たしてはじめて日本は世界の孤児から脱却でき、日本に真に明るい平和な世紀が訪れるであらうでしょう。



通訳の宋さんと一息

私はいま、「平和を守るたたかいに日本国民全員が参加してください！」と叫びたいと思います。

(2014年5月20日記 ここまでは絵鳩さんが準備された原稿にもとづいて編集しました)

インタビュー続編

1、管理所にいる時、朝鮮戦争のことはご存知だったのでしょうか。そして、朝鮮戦争の結果によつて、はやく日本へ戻れるという気持ちがありましたか？

朝鮮戦争の推移は、各部屋に入った『人民日報』によって兵隊たちは詳しく知ることができました。そこで、その当時の日本人戦犯はどんなことを考えていたのかと言うと、恥ずかしいことですが、日本軍が負けたアメリカ

軍に、朝鮮や中国の軍隊が太刀打ちできるはずはない。必ずアメリカ軍が国境を越えてきて、われわれを救い出してくれるのではないかと。みんなそのようなことを考えていました。

しかし、北朝鮮軍と中国軍がアメリカ軍を押し返して停戦に持ちこんだ、そのことを知ったとき、収容所長がそのことを全戦犯に知らせてくれました。この所長の話と新聞に書かれていた事実によってみんなの気持ちも変わっていったのです。そう思います。

気持ちがどのように変わったのでしょうか？

勝てるはずはないとった北朝鮮と中国の共同軍隊が、世界最強と誰もが思っていたアメリカ軍を破りましたね。これはやはり脅威でした。と同時に『人民日報』に載っている民衆たちの活躍が報道されますね。そのこととあわせて、やはり時代は変わったのだ、と。自分たちはファシズムの衣を着ていたのだが、その衣を脱ぐときがきたのだ、と一様に感じたと思います。

上の将校連中のことはよくわかりませんが、少なくとも、われわれ尉官や兵隊はそのことによって大きく転変していると思います。

だから、朝鮮戦争を停戦に追い込んだということはショックであるとともに、大きな思想転変になっていると、僕は思います。

2、管理所ではご家族と連絡がとれましたか？

ソ連で収容されていたとき、多くのものは1回だけ家族との連絡ができました。だが、僕はソ連では「反動分子」だったものですからそれも許されませんでした。中国へ移管されて、撫順で認罪運動がはじまりました。そのとき僕は、自分の意思で捕虜を殺したのではないのでどうしてもそれが自分の責任とは思えなかったのです。

認罪のとき、各部屋にみんなが集まって10数名のメンバーがそれぞれ認罪を行うのです。派遣されてきた検察官がそれを聞いて、「よし！合格」と、どんどん合格していくのですが、僕は1回目「ダメ！」と言われ、2回目もダメでした。3回目でやっとパスしたのですが、このように認罪運動では劣等生だったのです。

そのときに、北京から派遣されてきた高級検察官ですかね、大学教授のような印象を受ける譚風(タンフー)という先生でした。この方が直接僕を呼んで指導してくれたのです。そのときに「あなたは結婚しているのですね」と言うのです。そこで僕は「婚約者はいませんが、結婚はまだです」と応えたら「その方に手紙を出しましたか」と聞かれました。もちろん彼女には出していません。そしたら譚風先生は、ご自分の万年筆を出して、「すぐに書きなさい。私が責任もつて出してあげるから」と言われたのです。そしてそれを送ってくださいました。涙が出ましたね。ほかの人はみんな1回でしたが、僕は2回連絡することができました。

その手紙が着いて、翌年妻からセー

ターや日用品などを送ってもらうことができました。

3、認罪運動のとき、強いプレッシャーとか緊張感を感じましたか？

認罪運動のきっかけがつけられたのは、全員が広場に集められて、宮崎弘(ヒロム)という将校がみんなの前で模範的な認罪、つまり彼の犯した罪のすべてを述べたのです。その内容はものすごいことで、身の毛のよだつような犯罪の数々で、その一つはある部落を包囲してその部落民 500 名を全員殺害してしまった事実とか、捕虜になった少年が、彼になにか食べ物を差し出したそうですが、「こんなもの食えるか！」と逆上してその少年の首を切ってしまったという、そのような彼が体験した犯罪を次々述べたのです。

証言が終わって、管理所長の訓示がありました。「いま、宮崎弘が述べた認罪は比較的よかった。皆さんは部屋に帰ったらよく学習しなさい」と言ったのです。

この話を受けて部屋に帰ったら大騒ぎです。宮崎は最後の言葉として「このような犯罪を犯した私は、いかなる処分でも受けます」と言ったのです。彼はあそこまで言つたのだからどこかへ連れて行かれて首を切られるのだろう、と考えてみんな戦々恐々だったのです。

しばらくの間、「宮崎が言ったあんなことまで自己暴露しなければいけないのだろうか」とみんな悩んだのです。なかには「自分はそんなに悪いこ

とはしていないのだが、それでもどんな処罰をされるだろうか」などなど。

すでにこの時点で管理所に来て4年も経っているのです(ソ連から中国側に引き渡されて撫順に到着して管理所に収容されたのが 1950 年 7 月 20 日の早朝であった。そして宮崎がみんなの前で認罪したのが 54 年 4 月だった)。この4年間にかけられた管理所職員の献身的な態度や手厚い待遇に接して、そのころはみんな中国に対する信頼感をもっていました。

ところが、自分の罪とその責任が身に降りかかってくるとその意識が逆転してしまうのです。以降、約1ヶ月にわたってみんな苦しみました。各部屋で、討論に討論を重ねました。ようやく出た結果は、やはりわれわれは「全員軍事裁判を受けるべきだ」という結論に到達したのです。約1ヶ月にわたる討論のなかで再びわれわれの思想は再逆転したのです。今度は「軍事裁判を行ってください」という全員署名の嘆願書を出したのです。

こうして開始された軍事裁判は撫順の女学校を会場に行われました。そこに、最後の 350 人が集められました。そこで一人一人名前を読み上げられて、「起訴免除、即日釈放」と言われたとき、みんなファーッと泣いたのです。そしてみんなで手を上げて発言をしたのですが、皆んな一様に中国の寛大政策に心から感謝して、「私たちは戦争に反対し、日中友好に尽くします」と傍聴も大勢詰めかけている中国人の前で誓いました。

このような体験があつたからこそ、

国後中帰連という組織をつくって45年間、ささやかながら活動が続けられました。

4、絵鳩さんにとって印象深い指導員、工作人員のことについてお話しください。

まず最初の一人は、直接私たちの学習を指導していただいた呉浩然先生です。この方は朝鮮半島出身と聞きました。この先生は、聞くところによると実の父親が日本軍によって殺害された、というのです。だが、われわれに接する先生はじつに優しく、つねに笑顔で、親身になって私たちを指導してくれました。大変ありがたい先生です。いつも笑顔絶やさないうばかりか、あれはお正月を迎えるときのことでした。私たちには倶楽（娯楽室、読書室）が解放されて、そこで歌を歌ったり、食事をしたり、踊ったりすることができました。私たちはみんなが集まる場所に壁新聞を作って貼り出ししたりする者、部屋の飾りを作ったりする者など手分けして正月の準備が行われました。

その日は私たちにも就寝時間の制限が解除されていたものですから夜中の2時ごろまでみんなで準備を進めていました。呉浩然先生は、その日は帰らずにその後も各部屋を見回ってその晩は一睡もしなかったそうです。先生が帰宅されたのが正月2日の夕刻だった、とあとで聞きました。これは日本人にもできることではありません。

帰国後、先生御夫妻を2回日本にお招きして旧交を温め、みんなでささやかな恩返しをしました。

もう一人は、先ほど話した譚風先生のことです。そしてもうひとりには崔仁傑先生です。日本語の通訳をされた方で、おもに佐官とか将官たちを指導された方ですが、私たちがハルピン収容所に移動したときに知ったのですが、私たちはだんだん遊びに飽きてきて、小説を作ったりしていたのです。そして自分たちで作ったものを読んでいたので、といつても仲間が戯れに作ったもので、その友だちの体験が書かれていて、とても公表できるような内容ではなかったのです。それを崔先生はずーっと聞いていたらしいのです。そして「なかなかいいよ」と褒められたのです。これには僕はまったく閉口しましたが、日本にも度々来られてたいへん親しくしていただきました。崔先生は日本人より日本語が達者でしたね。

5、文化大革命のとき、管理所の先生たちが戦争中に日本人を教育したことで、たいへんな目にあつたということを絵鳩さんにご存知でしたか？

後になって知ったことです。文化大革命のことが、日本で報道されたときに僕は信じられませんでした。私たちの会が二つに分かれたときに、共産党を支持する人たちは、文化大革命は中国人民への圧迫であると非難しました。もう一方の社会党を指示する側は、

その報道を信じなかったのです。

中国での真実がわからなかったのですね。私たちが接した中国共産党のことを考えれば決して誤った方向に進んでいるはずはない、という信念が強かったために日本で報道されていることを信じられませんでした。

文化大革命において管理所の先生方、呉先生、金源先生をはじめとする管理所の人たちが農村に送られたり、街頭に引き出されたというようなことはあとで知ったことです。その当時は知りませんでした。

文化大革命の当時、私は会員に対して、「中帰連会員としては、中国政府を信頼せよ」という激を飛ばしたことがあります。会自体としては文革が始まってまもなく分裂していて、統一するまでの間に会を招集すると、共産党系の人たちは文化大革命のことを取りあげて、「お前たち（一方の社会党系のメンバーに）は、文化大革命を支持した」とずいぶん攻撃し、お互いが批判しあったのです。

だが、この問題はそのままに置いて、私たちは中国に対する認罪、すなわち罪を償うということがわれわれの原点であるということを話しあって、最終的に統一ができたのです。したがって文化大革命の問題は会員のなかでは未解決のまま今日までできています。しかし、そのことが会の活動に大きな障害となることはありませんでした。

6、管理所で絵鳩さんたちは管理所職員たちにずいぶんお世話になって、たいせつに扱われたのです

ね。

ところが絵鳩さんたちが帰ったあとは、管理所の先生たちが「反右派闘争」とか文化大革命の中で批判されたり労働させられたりしていたいへんな苦勞をさせられましたね。このような事実について絵鳩さんたちはどのようにお感じになりますか？

私としては言いにくいことですが、毛沢東の晩年は老人にしからしむる、やむをえないことだと思いますが、一種の「ボケ」が影響したのではないのでしょうか。毛沢東の考えのなかにはいままでの毛沢東の考えと違った考えが住みついたということではないのでしょうか。具体的に言いますと、年をとってくると自己中心的な考えになりがちですね。毛沢東の場合、それが自己の権力を守ろうとする、そのような思いに強く影響したのではないかと僕は思うのです。

したがって、文化大革命というのは毛沢東の一つの姿勢にあらわれたのであった。その犠牲になったのが管理所の先生方だったのではないかと、私の考えはまちがっているかもしれませんが、そう思います。

7、中国で戦争を体験した数 100 万人もの日本兵が帰国していますが、加害の体験を正直に話しているのは中帰連の方の他にはほとんどいないのはどうしてでしょうか。

戦争が終わって日本に帰った兵隊

たちは、それぞれ各師団や大隊ごとにまとまって、どの部隊でも「戦友会」をつくって集まりをもっています。僕もその戦友会に出席したことはありますが、そこでは過去自分たちが戦争で行った行為などについての反省などは一言も出ません。

そのなかでどんなことが話されていたか。

彼らが中国に渡ったときはみんな青年期で、若くてもつとも活動期でした。(会場の都合でインタビュー一時中断)

ひと言で言うならば、戦犯管理所に収容された者だけが、寛大政策を受けたことによって思想が転変しているのですね。

その他シベリアから帰った人たちや他の人たちは思想転変がないのです。したがってその人たちはあの時の戦争は正義の戦争であり、正しい戦争であった、とか自衛の戦争であったとか、そのような当時の政府の宣伝を飲みこんだままなのです。思想の転変がないのですから。

だから、中国で犯した、人を殺したこともすべて日本のためである、という考えのままです。だからそのことを彼らは心に止めないのですね。そんなことより、日本で、通常の世界生活では絶対にできない悪事ができた。それが楽しかった、という話をするのです。

中国人の食料を盗ったり、金銭をかすめたり、牛やロバを略奪してそれを街へ連れて行って売り飛ばして金儲けをした、という「楽しいこと」だけが心に残っているのです。戦友会で集まると、みんな「あのころは楽しかったなー」「面白かったなー」と犯罪行為までも「楽しい思い出」とされているのです。

中国で寛大政策を受けて思想転変したものだけが帰国後、侵略戦争の真実を語っているわけです。この中帰連も残り少なくなりましたがあとを期待するのは撫順の奇蹟を受け継ぐ会の方々です。ありがとうございました。

終わります。

絵鳩毅さん著 小冊子販売について (各送料別)

絵鳩さんは、28歳で戦争にとられて、帰国したのが43歳だった。人生のど真ん中を15年間、戦争とシベリアと撫順で費やされたわけです。何とかしてこの15年間の部分だけでも記録に残せないものかと検討して発刊したのが以下の3部作です。

第1作 「撫順戦犯管理所の6年」 (400円) すでに在庫がなくなりました。再刊を計画しています。発刊しだい送ります。

第2作 「シベリア抑留の5年」 (400円)

第3作 「皇軍兵士の4年」 (400円)

注文は FAX、及びメール (本紙1ページ参照) で、松山あてにご注文ください。